

## 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ活動報告

C. D. ケアリ

フルブライト大学院研究生, スタンフォード大学日本文学博士課程, 名古屋大学比較人文学研究室

これは、私がイニシアティブからの助成を得て行った、イギリスとアイルランドへの発表および調査のための旅行についての報告である。この旅行には他に名古屋大学教授阿部泰郎先生、昭和女子大学非常勤講師阿部美香氏、大阪大学非常勤講師米田真理子氏、名古屋大学大学院生小林奈央子氏、三好俊徳氏の5名が参加し、九日でロンドン、オックスフォード、ダブリン、キルケニー、とキャッセルを周った。それぞれの土地での活動は、以下に述べる。

本旅行の最初にして最大の目的は、3月17日、18日に行われるロンドン大学アジア・アフリカ研究所(SOAS)における学術ワークショップに参加することであった。阿部泰郎先生と阿部美香氏は、調査のため一足早く3月14日にパリへ向かったが、私と小林氏、三好氏は同行せずに、シンポジウム前日である16日の到着を目指して、日本時間3月16日9時40分発のソウル経由ロンドン行きの大韓航空で日本を出発した。その便に間に合うように、私は早朝に起床し、名城線の始発電車に乗った。金山で名鉄線に乗り換えて、中部国際空港に向かった。他の3人より早く着いたので、集合場所であったH.I.S.のカウンターでしばらく待たなければならなかった。実は、その前日に東京で勉強している姪が名古屋に私を訪ねて来ており、2人で田縣神社の豊年祭を見学に行っていた。そのため、この時点でひどく疲れていた。そのうちに三好氏が到着した。彼は黒い鞆を持っていたが、中にはロンドン大学での日本中世宗教ワークショップのためにまとめた私たちの発表資料集が40冊程入っていた。

去る2006年4月に、私は阿部先生と一緒にコロンビア大学の神道シンポジウムに参加した。その時、私は資料集を運ぶのを手伝った。今回は三好氏の番であったと言えるだろう。私は手伝うと言ったが、彼は丁寧に断った。私は軽いリュックとコンピューターも入っていない小さいコンピューターケースしか持っていかなかったもので、三好氏が断ってくれてよかったと思った。1984年に初めてヨーロッパへ旅行したとき、私はとても大きいリュックとギターを持って行った

が、重くて死にそうであった。

そのとき私がわかった事は、旅行するときは重い鞆を持っていくべきではないという事である。毎日同じ洋服を着ても、誰も分からないから別に構わないのである。それから、沢山のユースホステルやB&Bにはギターが置いてあるので、わざわざ持って行かなくてもいいのである。(少なくとも、小さいトラベルギターを買えば済むことであろう。)これは私のちょっとした旅行の哲学であるが、失敗する場合もある。例えば、名古屋大学に来たとき、参考書はもっと沢山持ってくればよかったと思う。

ようやく小林氏が着いた。ピンク色の鞆を持っていた。目立つ色だと思った。その後、三人でチェックインした。インチョン空港までの便は皆が隣の席であったが、インチョンからヒースロー空港までの便では三好氏は離れた席となった。私はとても疲れていたのに、機内では眠れない癖があるため、久しぶりに新しいアメリカ映画を何本か観た。通常、アメリカ映画はアメリカで上映されて1-2年後に日本で上映されるため、私は日本に着いてからあまりアメリカ映画を見ていなかった。映画館で上映されている映画は私がすでに見たものか、見たくもないものばかりだからである。もちろん、これは勉学に集中するためには素晴らしい環境ではあるが、時々母国語で映画が見たくなる。いくら疲れていても、新しいアメリカ映画が見られることは幸せであった。

ヒースロー空港で米田氏と合流した。宿泊するホテルに向かうため、パディングトン駅まで新しく敷設されたヒースローエクスプレスに乗り、それから地下鉄に乗り換えて、そしてグロスターロードというところでまた乗り換えなければならなかった。そのため、ラッセルスクエアのホテルに着いたときは大分疲れていた。ロンドン地下鉄の駅は大変古くてエレベーターがあまりないため、重い鞆を持ってきた人は、階段で持ち上げなければならなかったのがかわいそうだった。ホテルでは、阿部先生と阿部美香氏とロンドン大学で集中講義をされていた彌永信美先生とロンド



大英図書館の前

ン大学のルチア・ドルチェ先生と待ち合わせをしていた。そのため、疲れてはいたが、近所のパブでおいしいごちそうを食べて、夜遅くまで面白い学術的な話をした。

次の日は聖パトリックの祝日だったが、日本中世宗教ワークショップの日でもあった。ワークショップへ行く前に大英図書館に寄って、ドルチェ先生と一緒に貴重書を見せていただいた。メインの展示室では、仏教の経典や日本の絵巻物がいくつかあったが、やはりイギリスの元植民地であるインドやビルマの本が多かった。もちろん、イギリスの古い本は最も多かった。特に、有名な『リンディスファーン福音書』が見られたのはとても嬉しかった。「マグナカルタ」の原稿が何枚かそろっている部屋もあった。私は日本の中世宗教に関心があるが、ヨーロッパの中世も興味深いと思った。

メインの展示室を見てから、司書に日本のコレクションを案内していただいた。ダブリンで国際奈良絵本・絵巻学会に出席する予定だったため、特に『大織冠』や『熊野の本地』などの奈良絵本を13-14冊ほど見せていただいた。私はその時まで、日本美術のなかで奈良絵本をあまり意識していなかったが、勉強になった。阿部先生はどんな事にも詳しく、奈良絵本についてもいろいろと教えてくれた。また、『大織冠』の卷子本が三冊あったので、各本の特徴を比較・検討した。

日本のコレクションの閲覧時間は、1時間と限られていた。そこで、1時間後に図書館を出て、昼食をとった後にワークショップが始まった。17日はロンドン大学と名古屋大学の大学院生が発表する日であった。

始めに発表したのは小林氏であった。テーマは御嶽

行者の御座儀礼であった。事前に小林さんが発表する内容を聞いていたが、改めて大変興味深い研究だと思った。御座儀礼というのは修験道の儀礼であり、御嶽信仰では特に重視されている。これは一種のシャーマニズムであり、前座という役割を果たす人が霊神を呼んで、その霊神が中座の体に降臨する。霊神はいろいろな種類がいるようである。例えば、祇戸の大神や観音菩薩のような仏様などであるが、亡くなった御嶽信仰の行者も霊神になる場合があるそうである。これらの霊神にはヒエラルキーがあるそうである。日常の御座には低位の霊神が降臨する。これは各御嶽講の開祖とか有名な行者のような霊神である。しかし、特別な大祭とか修行祭の時はもっと高位の霊神が降臨する。それは神仏のような霊神である。これと同様に、御嶽山には霊神碑があるが、ふもとでは低位の霊神碑が並んでおり、より高いところではより高位の霊神碑が立っているということである。霊神は中座の体に降臨してからさまざまな事について託宣する。例えば、御座に来た信者にお礼をいい、信者の質問に答える。信者の質問の多くは生活に関するものである。病人の具合はどうなるか、受験の結果はどうなるかなど、家庭の状態について聞くそうである。

私は前座の役割が特に面白いと思った。西洋のシャーマニズムでそのような役割があまりないように思う。西洋の国では同じ霊能者が前座の役割も中座の役割も果たすのが通常である。しかし、御嶽信仰では仲介する人がいる。これは、日本人らしいと思う。精神の世界は地球と同じような社会秩序になる。

次に発表したのはロンドン大学のロベティー氏であった。ロベティー氏は日本宗教における修行者と一般信者の関係について論じた。主な例として、御嶽講と曹洞宗を取り上げていた。結論は、一般信者が修行者から望むことは、精神的な果報ではなく、現実的な恩恵であるということであった。一般信者は、宗教の抽象的な議論に興味を持っておらず、修行者や信者の修行を通して、宗教が信者に対して、現実にとどのような利益をもたらすことができるかが重要なポイントとなるそうである。このように精神の世界と世俗の世界が近づいてくる、とロベティー氏は論じた。

ロベティー氏の発表に次いで、ロンドン大学の堀内氏が発表した。堀内氏は日本のキリスト教における葬式や追悼の儀礼について論じた。以下に、その内容について概説する。日本のキリスト教はプロテスタントの影響が強い。プロテスタントでは通常、追悼式を行わない。何故ならば、死人の救済は神様が決める事で

あるからである。人間はその決定に従うのみなのであるということである。しかし、日本のキリスト教では追悼式を行うために、民間宗教の影響だと批判されている。日本人は祖先供養をするために、日本のキリスト教徒は追悼式を行うのであるということである。このような批判を行うのは、西洋のプロテスタント学者である。しかし堀内氏によると、日本のキリスト教徒の追悼式は必ずしも祖先供養だとは限らないということである。日本のキリスト教徒は、祖先を祀っているわけではなく、近い親戚の死を悼んでいるだけだというのである。また、全てのキリスト教徒が、追悼式について同じように考えているわけではない。カトリックとギリシャ正教会では、毎年死人のための追悼式を行っている。また、カトリック教徒は、亡くなった親戚の墓に花とか蝋燭を持って行く。プロテスタントではこんな習慣がないために、日本の信者が自分の習慣を發明しただけなのである。それは祖先供養ではなく、亡くなった親戚に対して、愛や感謝の気持ちを表すための儀礼なのである。私は堀内氏の発表に感心したが、キリスト教について詳しくないため、あまりコメントはできなかった。

堀内氏の発表が終わった後、三好氏が真福寺大須文庫に所蔵される歴史テキストについて発表した。三好氏は、中世において仏教史書はどのような意味を持っていたのかを考察した。『扶桑略記』や『仏法伝来次第』や『水鏡』のような仏教史書の特徴を分析し、真福寺に所蔵されるテキストの多様性を指摘した。そして、そのような仏教史書は、寺院の論争の場で用いられる知識として活用されていたと述べた。仏教史書ならびに仏教史叙述は宗派や教義を語りつつも、寺院の政治的な側面とも関わるものであり、そのために、中世の寺院において多様な仏教史書が求められたということが三好氏の結論であった。大変よくまとまった発表だと思った。

次にロンドン大学の真野氏が発表を行った。真野氏は、台密僧栄西の思想と新義真言宗僧覚鑊の思想について述べた。真野氏によると、覚鑊の思想は栄西の思想に二種類の影響を及ぼしたということである。一つは阿弥陀仏に対する見方であり、もう一つは五臓観という修行であった。覚鑊は『五輪九字明秘密釈』において、浄土仏教と密教教義と修行とを組み合わせようとしたが、栄西も『出纏大綱』という書物で同じ事を試みているということである。『出纏大綱』は『五輪九字明秘密釈』より後に著された書物であるが、割注から覚鑊の影響は明確であり、従って、栄西は覚鑊と

同様に阿弥陀仏と大日如来を共に諸仏の本源だと信じていたと述べていた。『沙石集』にも栄西は浄土教に興味を持っていたことが記されている。また、五臓観は『三種悉地破地獄儀軌』というテキストで説かれているが、覚鑊はそれを改めて解釈した人物である。覚鑊の解釈では、人間の五臓は小宇宙であり、五行は大宇宙であった。覚鑊は、この小宇宙と大宇宙の一致は即身成仏の原因になると考えていたということである。また、栄西は『喫茶養成記』で『三種悉地破地獄儀軌』にも覚鑊の解釈にも触れているが、覚鑊の解釈と違って、即身成仏の方法として位置づけるのではなく、体の養成のためのものと位置づける。そこでは、喫茶は人間の心臓のために良いと述べ、菩提心を養うためにも良いとされている。真野氏の発表で面白いと思ったところは、覚鑊の影響が栄西の生涯全体に渡るという点である。なぜなら、『出纏大綱』は栄西の早い時代の著作であり、『喫茶養成記』は彼の最後の著作であるからである。また、「禅」の普及で著名な栄西の思想の多様性がよくわかる研究だと思った。

私は真野氏の後に発表を行った。テーマは「民間伝承としての『平家物語』——慈心坊尊恵の説話」であった。『平家物語』の「慈心坊」の段は清盛の死から二話目である。話しの筋としては慈心坊という僧侶が閻魔大王から地獄に招待され、そこで一万人の持経者が『法華経』を唱える儀礼を見る。その儀礼が終わったところで、閻魔大王は慈心坊に平清盛が慈恵大僧正の化身であると述べる。それから、「敬礼慈恵大僧正、天台仏法擁護者、示現最勝將軍身、悪業衆生同利益」という偈を唱える。すなわち、清盛は慈恵大僧正という天台座主の化身であり、天下を乱した悪業は善をなすと同じ結果になるという意味である。慈心坊は蘇生した後、清盛にこの話を語ったとして締め括られる。以上のように簡単な説話であるが、地獄巡りという観点からみると興味深い説話である。私は先ず『平家物語』や慈心坊説話の歴史的な背景を考察し、その後、説話の評論を行った。『平家物語』は伝本が多く、それぞれのテキストには口頭伝承が多く含まれると考えられている。それぞれが、とても長いテキストである。そのため、第一の問題としては琵琶法師がどのようにその長いテキストを暗記したかという事が挙げられる。何か記憶に関する特別な技があったのであろうか。残念ながら、日本の記憶術について、その詳細は知られていないが、西洋の記憶術に関する研究書はいくつかあるので、そこから出発した。

西洋の国々では長い叙事詩、例えばホメロスの『オ

デュッセイア』など、を唱える人は「記憶の宮殿」という技を用いたと言われている。「記憶の宮殿」とは、想像上の宮殿である。長いテキストを暗記したい場合、先ずその宮殿を想像し、それからテキストの各巻を各部屋に仕舞っておく。そうすれば、テキストを唱えるとき、自分がその宮殿の中を歩いていることを想像し、各部屋から各巻を取り出せばいいということである。

実は、部屋だけではなく、廊下にもテキストの部分を蓄える。部屋で仕舞う巻と廊下で仕舞う巻の違いは、難しい巻は部屋で仕舞い、簡単な巻は廊下で仕舞うのである。難しい巻を唱え終わったら、次の難しい巻が仕舞ってある部屋まで歩いている間に廊下で仕舞った簡単な巻を唱える。簡単な巻と言え、例えば、英雄の血統を述べる所や、誰でもよく知っている説話を述べる。日本の琵琶法師も似たような記憶術を使用したのではないかと私は考えている。そして、『平家物語』における慈心坊説話はまさにそういう廊下の巻ではないとも考えている。渥美かおる氏は日本の琵琶法師がおそらく、何らかの記憶術を使ったと指摘しているが、詳細については記していない。また、渥美氏は中国の変文や講史の『平家物語』に対する影響について記しており、大変興味深い。『入唐求法巡礼行記』を書いた円仁は長安で変文の実演を見たようであるが、この風俗習慣は確かに日本の絵解きに影響したそうである。

そして、私は持経者の姿勢について、『日本霊異記』や『法華験記』に出てくる持経者に関する説話から考察を行った。それらの考察を踏まえて、最後に『平家物語』における慈心坊説話の意味について検討を行った。そして、それは厄除けの役割があったと指摘した。琵琶法師の身になって考えれば、『平家物語』を



私の発表。隣に座っているのはコメントーターの竹内先生

語るということは、清盛の悪行について様々に述べ、彼が地獄に落ちたことまで示唆することになるのであるが、そこまで清盛の悪口を述べれば、彼の怨霊の復讐を恐れなければならないのではないだろうか。そのため、清盛の悪口を述べた後に、清盛を鎮魂するために慈心坊説話が位置づけられているのではないだろうか。このように考えると慈心坊説話を面白く読めると考える。

最後に発表したのは、ロンドン大学のリチャ氏であった。リチャ氏は曹洞宗の切紙について発表した。曹洞宗の切紙については、石川力山氏の先駆的な研究以降、あまり研究がなされていないということである。リチャ氏の発表では、切紙が瑩山禅師(1268-1325)の時代に増えるということである。瑩山は曹洞宗の法を日本の地方まで広めたことで有名な禅僧である。切紙が教線拡大の過程で重要とされたのは、法門の系譜とか法力を強調するためであったと言うことである。それから、ウイトゲンシュタインとかオースティンの言語哲学をもとにしてその切紙を分析した。結論としては、それは一種の言語ゲームだとリチャ氏は述べた。私は、禅僧の言説や行動を現象学的に解釈しているので、言語哲学を用いた分析に難点はあると考えるが、ここではその議論を省略する。リチャ氏は聡明な人物であり、大変興味深い発表を行った。

全ての発表が終わった後、懇親会が催された。

次の日、阿部先生が発表を行った。テーマは「文観著作聖教の再発見——「三尊合行法」関係聖教資料について——」であった。文観弘真(1278~1357)は後醍醐天皇の殊寓を得て、西大寺流律僧の出身ながら、東寺長者・法務大僧正・醍醐寺座主となり、真言宗の頂点に立った人物である。しかし、彼の著作の全貌は、未だ殆ど明らかにされていない。従って、そのテキスト自体も、文献学的にはなおその様相が明かでなく、密教の歴史のなかで確実に位置付けられていないということである。先生が近年行っている真福寺大須文庫の調査の結果として、彼の著作と認められる聖教が多く見いだされている。また、自筆の聖教まで発見された。この調査とともに、文観の著作と確認される新発見の聖教類が、諸寺院の文庫から出現した。先生の報告は、それらの文観による聖教、すなわち宗教テキストの一類を文献学的に位置付け、思想上の特質を読み解きながら、そのテキストの位相を把握しようとするものであった。その作業を通して、文観の宗教上の構想の復原が行われた。また新出の著作の発見が明らかにしたのは、その思想の領域が、中世密教思想の

流れの上に立って、より広がりとお興行を持ったことであると指摘した。報告が終わった後、ドルチェ先生と彌永先生から、いろいろと質疑があり、興味深い討論が行われた。

このワークショップは13:00頃に終わり、SOASの食堂で昼食をとりながら懇親会が行われた。その後、ドルチェ先生にSOASのブルネイー美術館を案内していただいた。そこで特に興味深かったものは、アラビアの千一夜物語を英訳したリチャードバートンの有名な肖像であった。私は何回もその肖像を本の中で見たことがあるが、本物はより印象的であった。彼はアフリカで槍に刺された話が有名であるが、肖像でもその傷が頬に表されていた。

ブルネイー美術館から直接大英博物館に向かった。大英博物館は大きい建物なので、2-3時間だけでは全部見られない。そのため、私たちは日本、中国、韓国の展示室を見た。それから、有名な古代エジプトの展示室や、ケルト、アングロサクソン民族の展示室も見学した。私は1984年に大英博物館を訪れたが、その時から大きく変わっていた。古代エジプトの展示室は特に大きくなっていった。さらに、以前はアングロサクソンのサットンフーの兜は本物が展示してあったが、現在展示しているものは模造品であった。これには、私も皆もがっかりした。

博物館は6:00に閉まったため、しばらくはそのあたりを散歩して買い物をした。皆はスコットランドの店でお土産を買ったが、私は、この後向かうアイルランドで、よりいい品質のものがあるだろうと思いつても買わなかった。これは結局大失敗であった。アイルランドでは様々な理由であまり買い物ができなかったからである。

その後、私たちはホテルへ帰り、ドルチェ先生や彌

永先生、ロンドン大学の院生の皆さんに会い、夕食を食べにインド料理店に行った。ロンドンにはインド人が多いので、おいしいインド料理屋が多い。その夜は話が盛り上がり、遅くまで皆さんと一緒に過ごした。

18日は、朝早くバスに乗ってオックスフォードに行った。オックスフォードでは、昼食にイギリスの伝統的なパイを食べた（私は野菜と茸のパイを食べた）。午後には、ボドレーアン図書館に行き、日本館館長のタイトラー氏の説明とともに奈良絵本のコレクションを閲覧させていただいた。ボドレーアン図書館の日本貴重書コレクションの目録は19世紀に著名な仏教学者南条文雄が作成しており、その手書き原稿も閲覧した。

ボドレーアンは5:00に閉まったため、私たちはその夜オックスフォードの道々を歩き回って中世時代の建築を見て回った。後でわかったことであるが、そのとき、有名な作家C. S. Lewisや『ロード・オブ・ザ・リング』の作者J. R. R. Tolkienが毎週のように集まったパブを通り過ぎてしまった。今更ながら、残念だと思う。「鷲と赤ちゃん」というパブが、それである。オックスフォードに行った際には、是非立ち寄ってもらいたい。壁に札もあるそうである。

私たちは次の日にウエールズのホーリヘッドまで電車で行き、フェリーでダブリンに渡った。フェリーに乗っている間に、米田氏が研究発表を行ってくれた。テーマは「千代野物語の絵と詞と」であったが、日本の曹洞宗で初めて悟りを開いたといわれる女性の話であり、大変面白かった。発表の後、みんなで仏教における女性の役割について討議した。

ダブリンのホテルはバスの駅に近かったので、フェリーを降りた後、駅までバスに乗り、それからホテルまで歩いた。その夜はホテルでアイルランドのダンス



大英博物館の前



ボドレーアン図書館で



船上にて米田さんの発表をめぐるフォーラム



チェスタービーティール図書館の前

演技を見た。私の妹は幼年期にアイルランドのダンスを習ったため、大変懐かしかった。

翌日、私たちはキルケニーまでバスで向かった。しかし、聖金曜日のために多くの観光地や店舗は閉まっていた。キルケニー城も外見を観ることしかできなかった。そして、アイルランドの伝統的なセーターや洋服を売る店はみんな閉まっていたため、結局、ロンドンの土産物屋で購入しなかったことを後悔した。しかし、キルケニーの有名な大聖堂はみんな開いていたため、聖メアリー教会や聖カニス教会、ブラックフライアズ修道院を見て周った。途中で、霧が突然降ってきたが、すぐに止んだ。ダブリンへ帰ってからは、夜の間一人で街を散歩した。

次の朝、私たちはトリニティーカレッジでケルズの書などの中世時代の書物を見て、感動した。私はかつて、スコットランドのアイオナ島でもケルズの書のコピーを見たことがあるが、一度に一頁しか見られないので、また別な頁が見られてよかったと思う。次いで、チェスタービーティール図書館に向かい、そこで開

催されていた奈良絵本・絵巻学会に参加した。そこで、何人かの先生が奈良絵本について話したが、多くはチェスタービーティール卿やその図書館についての歴史であった。私としては、展示のほうが興味深かった。チェスタービーティール卿は本当に趣味がいい人であったと思う。彼が集めた日本やアジア各国の絵本はとてもきれいである。地獄巡り文学について修士論文を書いた私としては、「義経地獄破り」や「百鬼夜行絵巻」、「朝比奈物語絵巻」に関心を持った。その夜私たちはダブリンのおしゃれなテンプルバーでアイルランドの伝統的な音楽を聞きに行った。バンドは特に上手だと私は思った。

学会が終わった後、私たちはキャッシュェルへバスで向かった。キャッシュェルでは、ロック・オブ・キャッシュェルという中世時代の聖堂や古い街並みを観て回った。ホール修道院も大変古い歴史があるところである。24日の朝、私たちは早く起きて、ダブリンまでバスで向かい、空港で最後のおいしいアイルランド製のギネス・ビールを飲んで、名古屋へ帰った。